

1970年代以降の日本の人類学における 韓国社会研究

本田 洋 *

本論では、日本の研究者による韓国社会を対象とした社会・文化人類学的研究の展開について、①1970年代初頭、現地での民族誌研究の再開／開始以降の第一世代による農村社会研究の実践とその成果の学的規範化、②歴史人類学・歴史民族誌的研究の試みを通じた規範的研究の脈絡化と脱構築、そして③錯綜するフィールドの現在への民族誌的接近に分けて論じる。この議論を通じて、韓国社会を対象とした日本の人類学的な現地研究が、一方で先行する民族誌研究を踏まえつつも絶えず更新されるフィールドの現在と向き合いながら、他方で日韓の研究者・知識人、さらには市民をも含む、異質性の高い諸主体によって構成される対話と知識生産の複合的な場との関係を交渉しつつ、主体的かつ創造的に実践されてきたことを確認する。なかでも第一世代の研究者によって達成された質の高い農村社会研究が、一方で歴史人類学・歴史民族誌的な試みによっていかに相対化・客観化されていったのか、他方でフィールドの錯綜する現実と人類学自体の変化に触発され、どのような民族誌的な試みが展開されるようになったのかを、個別の研究成果を引用しつつ、具体的に論じる。

KeyWords

韓国
農村社会研究
規範化
歴史人類学
フィールドの現在

目次

- I. 序論
- II. 1970年代以降の日本の人類学における
韓国社会研究：概観・背景説明
 - 1. 1970年代以降の日本の人類学における韓国社会研究の特徴
 - 2. 韓国社会／日本人類学の変化
- III. 学的規範としての農村社会研究
 - 1. 日本の人類学者による韓国農村社会研究の諸背景
 - 2. 韓国農村の社会人類学：村落コミュニティと親族関係
 - 3. 規範化の諸要因
 - 4. 1970～80年代農村社会研究の限界
- IV. 歴史人類学、歴史民族誌的試み
 - 1. 歴史人類学、歴史民族誌
 - 2. 規範の乗り越え方
 - 3. 1980年代末農村の歴史民族誌
- V. フィールドの現在への民族誌的接近
 - 1. 韓国社会の現在を捕捉する試み
 - 2. 研究の現場としての〈フィールド〉
- VI. 結語

I 序論

本論では、日本の社会・文化人類学における韓国社会研究の動向を、1970年代以降に絞って検討する。その理由は、戦後日本の人類学で韓国社会の研究が本格的に開始されたのが1970年代初頭であったことに求められる。ただしその前史として、日本人研究者、当時の言い方に従えば内地人研究者によって、植民地朝鮮の社会や民俗に関する現地研究、すなわち現地調査に基づく実証的な研究も行われていた。今村軀（今村 1914）、鳥居龍蔵（鳥居 1924）、小田内通敏（朝鮮総督府 1923）、村山智順（朝鮮総督府 1931, 1932 等）、善生永助（善生 1943）、秋葉隆（赤松・秋葉 1937・38; 秋葉 1954）、鈴木榮太郎（鈴木 1944）、泉靖一（泉 1966）といった人々をその代表例として挙げることができる。

しかし、日本の無条件降伏による第二次世界大戦の終結と朝鮮半島の植民地支配からの解放（以下、「終戦・解放」）により、この研究の流れは一旦途絶えることとなる。さらに1948年には南北に分かれたまま大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が相次いで独立し、この南北の政治的分断は朝鮮戦争と冷戦体制を通じて固着化される。このうち南の韓国と1965年に国交を正常化したのが、次に述べるように戦後日本の人類学における韓国社会研究の一方での「再開」、他方での「開始」の契機となった。周知の通り北朝鮮とは正式な国交が断絶した状態が今に至るまで続いており、またその政治体制ゆえに、短期の滞在調査を含め現地研究自体が事実上困難な状況にある¹。

ここで「再開」といったのは、まず、戦前に京城帝国大学で社会学者秋葉隆の指導を受け済州島の現地研究を行った泉靖一が、日韓国交正常化以降韓国を訪問するようになるなど、一部の研究者によって個人研究の再開が試みられたからである（ただし泉は1970年に急逝する）。くわえて、これ以降の人類学的研究と戦前の研究とのあいだに、学史レベルでの連続性も全的には排除できない。他方で詳しくは後述するように、泉と韓国の研究者との親交をひとつの契機として生まれた日韓の研究交流のなかから、戦前の研究とは一線を画するような新しい世代の韓国研究者が育っていった。彼ら戦後第一世代による現地研究の「開始」が、1971年夏、済州島出身の民俗学者で、当時東京大学に留学していた

玄容駿の紹介で佐藤信行と伊藤重人が行った済州市郊外吾羅1洞での短期調査であった。

これ以降、1970年代から80年代にかけて、相当数の日本の人類学者、ならびに人類学徒が、韓国の農漁村での長期の滞在調査、いわゆる人類学的なフィールドワークを実施するようになる。ここで注意を喚起しておきたいのは、戦後第一世代の研究者が1970年代の現地調査に基づき主に1970年代後半から1980年代後半にかけて発表した農村社会研究の成果、なかでも社会人類学的なアプローチによるものが、後継世代の研究者にとってある種の学的規範となっていたことである。これが本論の第一の主題となる。

一方、後継世代のなかでも1980年代後半以降に韓国での現地研究を開始した者にとって、これはあくまでも筆者の経験と感覚に従った物言いとなるが、一方でこの規範的研究を模範として参照しつつも、他方で急速に変化してゆくフィールドの現実をどのようにすくいあげ記述・分析してゆくのがひとつの課題となっていた。同時に、第一世代の研究者自身も新たな研究の可能性を追求してゆくようになった。本論の第二の主題である歴史人類学・歴史民族誌的研究は、主に1980年代後半までに発表された規範的な農村社会研究、ならびにその規範性を再生産するような1990年代前半以降の現地研究を相対化、脱構築、あるいは歴史化しつつ再評価する様々な試みとして位置付けることができる。また、1990年代を転機として、「そこにいたこと」としての民族誌的現在²、すなわちフィールドワーカーが経験するフィールドの現実の変化に即して、民族誌研究の対象と主題も多様化してゆく。それを概観するのが本論の第三の主題となる。

以上を踏まえて問題設定を整理すれば、1970年代初頭以降、40年あまりにわたる日本の人類学における韓国社会研究の蓄積を、筆者自身の経験に準拠しつつ素描・展望することが本論の課題となる。そしてこの課題を、一方でそれぞれの研究者が規範性を帯びた農村社会研究に対してどのような立ち位置をとるのかを見極めつつ、他方でフィールドの変化と持続性、いいかえれば「そこにいたこと」としての（人類学者がフィールドで経験する現実としての）民族誌的現在をどのように捉えるのかを緩やかに参照しながら解いてゆきたい。

論の構成としては、まず1970年代以降の日本の人類学

* 東京大学

1 ただし近年では、伊藤(2017)のように北朝鮮からの亡命者(脱北者)を協力者とした北朝鮮社会研究も試みられるようになってきている。

2 「そこにいたこと」(I-was-there)としての民族誌的現在の歴史的構築については、Sanjek (1991)、本田(2016b: 13)を参照のこと。

における韓国社会研究の概観と背景説明を行ったうえで(Ⅰ節)、農村社会研究の隆盛とその規範化(Ⅱ節)、歴史人類学・歴史民族誌的試み(Ⅲ節)、ならびにフィールドの現在への民族誌的接近(Ⅳ節)について、それぞれ実際の研究成果を例に挙げながら検討する。最後に結語として、筆者自身の現段階での研究展望を述べたい³。

Ⅱ 1970年代以降の 日本の人類学に おける韓国社会 研究：概観・背景 説明

本節では、1970年代以降の日本の人類学における韓国社会研究の概観ならびに背景説明として、まず当該時期を通じた諸特徴を指摘したうえで、研究動向の展開の背景として、韓国社会ならびに日本の人類学の変化を素描する。

1. 1970年代以降の日本の人類学 における韓国社会研究の特徴

ここでは当該研究動向に緩やかに共有される特徴を4点指摘する。

第一に先述の通り、前史として、植民地支配下の朝鮮社会を対象とした日本語での研究成果が終戦・解放までに相当程度蓄積されていたが、これに対してどのようなスタンスを取るのかがひとつの課題とされてきた。この点については、後述するように社会組織、民俗、宗教などの分野・主題、現地調査を行った時期、さらには研究者の学術志向性によって相当のばらつきが見られる。

第二に、隣国という地の利の活用である。1948年の大韓民国政府樹立以降も日本と韓国のあいだでは国交が回復されず、隣国といえども長期の滞在調査が困難な状況が続い

た。しかし1965年の日韓国交正常化後、特に韓国の研究者との交流が蓄積されていく過程で、日本の人類学者にとって長期短期のフィールドワークが比較的容易となり、隣国という地の利を生かして頻繁にフィールドを訪れることも可能となった。そこに緻密な民族誌研究を行いやすい環境が生まれた。また、2000年代初頭以降は双方の社会や文化に対する関心の高まりも助けとなり、短期の語学留学や学部段階での留学を含め、日韓相互の人の行き来がさらに活発となった。それが研究者のキャリアパスの多様化と近年の民族誌研究における多様な対象と主題の設定にもつながっていると考えられる。

第三に、韓国の研究者との密接な交流を挙げることができる。そのうち日本の人類学者による韓国現地研究の再開／開始以前の萌芽的段階については、東京大学で学位を取得した朴東誠が次のように整理している。まず韓国の研究者による日本留学の嚆矢として、民俗学者・人類学者である金宅圭が、国交正常化前の1960年代初頭に、天理大学を経て、泉靖一が在職する東京大学の文化人類学研究室に留学した。また1968年から1年弱、泉と親交のあった李杜鉉が同研究室に客員教授として勤務した。翌年には民俗学者張籌根が同研究室に招聘された。1970年には先述の済州島出身の民俗学者玄容駿もこの研究室に留学している(朴2015)。佐藤、伊藤や後述する末成など、同研究室出身の研究者や所属学生の一部が、彼らとの学術的交流を通じて韓国研究を志していった。

泉の急逝後は同じく東京大学の文化人類学研究室のスタッフであった中根千枝が、日韓の研究交流の肝いり役を担い、また若い日本の韓国研究者のメンターの役割を果たした。その様子を如実にうかがうことができるのが、1973年に中根編で東京大学出版会から刊行された『韓国農村の家族と祭儀』(中根(編)1973)という論集である。この著作には、まず韓国側の執筆者として、先述の李杜鉉、玄容駿、金宅圭、ならびにウィーン大学で学位を取得しソウル大学校に赴任した李光奎が名を連ねている。また日本の執筆者としては、先述の佐藤と伊藤、ならびに李光奎と慶尚北道星州の共同調査に当たった末成道男が加わっている。

東京大学文化人類学研究室を拠点とする日韓研究者の交流は、その後伊藤や末成に受け継がれ、相当数の人類

3 本論は当該時期の研究動向を網羅的に回顧し評価するものではなく、研究史上、いままでもあまり強調されてこなかったいくつかの論点を提示することを主眼とする。日本の人類学における韓国社会研究の動向を論じた論者は、伊藤・杉山(1986)、松本(1988)、伊藤(1996)、Itoh(2001)、Choi(ed.)(2013)(Matsumoto(2013)による文献リストを含む)、本田(2015)、Honda(2015)、Suzuki(2015)など、筆者自身によるものも含めすでに相当数に上る。嶋・朝倉(編)(1998)には、1966～95年の日本語による研究文献の目録も収録されている。また、研究動向の画期をなす論集として、伊藤・関本・船曳(編)(1987)とShima & Janelli(eds.)(1998)も参照されたい。

学者がこのネットワークを通じて韓国で現地研究を行うようになった。また上記の論集の他にも、日本の関連分野の研究者によって、韓国の研究者との共同研究が早い段階から試みられてきた⁴。さらに先述のように、近年では語学留学や学部段階での留学も増えており、それが韓国研究を志す契機になる場合も少なからず見られる。

第四に、これは第二の特徴として挙げた地の利とも関わりますが、日本の研究者にとって韓国の社会・文化は、ある面での「近さ」とある面での「遠さ」が複雑に交錯する、独特の距離感をもって捉えられてきた。「近さ」としては、中華文明の受容を核とする社会文化的伝統の緩やかな共有や稲作農耕など生業面に見られる類似性がある。また筆者自身は必ずしもそのような感覚を抱かなかったが、筆者より上の世代の研究者の中には、韓国の農村にある種のノスタルジアを投影する者もいたようである。さらに近年では、2002年のサッカー・ワールドカップの共同開催や韓国での日本大衆文化の段階的開放、ならびに日本での韓流ブームなども動力となって、人・情報の相互移動と多様な交流も進んでいる。他方で「遠さ」としては、父系血縁原理の教条的な受容と農村社会にまで浸透した階級伝統、伝統産業としての商工業の未発達と都市伝統の弱さ、あるいは巫俗を中心とする宗教信仰など、日本との社会経済的構造の違いや文化的な差異を挙げることができる。近代化・産業化過程の経路の相違や両国間の歴史的葛藤も「遠さ」の一因といえよう。以上の4点を特徴として挙げておきたい。

2. 韓国社会／日本人類学の変化

前項で述べたような特徴が緩やかに共有される一方で、1970年代から現在に至る40年あまりのあいだに、研究動向の変化も顕著に見られた。その重要な背景をなすものとして、一方で韓国社会の変化、他方で日本の人類学の変化にも触れておきたい。

1960年代後半から1970年代初頭にかけて日本の人類学者による現地研究が「再開」／「開始」された時点で、韓国社会はすでに急速な社会経済的変化の途上にあった。1960年代中盤に政府主導で、かつ輸出志向型工業化とし

て離陸した韓国経済は、1980年代までに目覚ましい高度成長を遂げた。その一方で、資本・資源の集中投下を特徴とする経済発展政策から疎外された大半の農村地域では、青壮年層を中心に極めて大規模の人口流出が展開した。これにより、筆者が現地調査を始めた1980年代末には、農村の過疎化と高齢化は深刻なものとなりつつあった。青年層の都市への人口流出は、その後も農村地域と地方都市の人口移動の基調をなしていった。またこの産業化の過程で、ホワイトカラーを主体とする都市中産層が厚みを増し、北米等への海外移民の増加も見られた(Park 1997: 7-17)。さらに社会経済面での変化の急激さによって、一言でいえば古い側面と新しい側面が不均衡に共存するような状況、いわゆる「圧縮された」近代と呼ばれるような状況も発生した(Chang 1999)。

これに対し1990年代以降は、一方で脱工業化、すなわちサービス産業、大衆消費社会、さらには情報化の拡大・進展、他方で1997年のアジア金融危機(韓国ではIMF危機と通称される)を画期とする新自由主義体制の本格的な導入とグローバル化が併行的に進んでいった。また、1990年代を転機とする社会福祉制度の本格的な導入も、家族・親族や日常生活圏における互助・協同の関係性の解体あるいは変質とともに、地域社会のあり方を変えていった(金 2008: 103-137)。その過程で、主流社会への参入競争の激化、中産層の解体・両極化、トランスナショナルリズムの浸透と多文化社会の形成、ならびに農村の商品化や資源化が進み、さらには市民的諸主体の形成も裾野の拡がりを見せるようになった。この1990年代以降の社会経済的変化は、近年の民族誌研究の多様化のひとつの背景ともなっている。

韓国社会がこのように変化しつづけるあいだ、日本の人類学においても大きな転機があった。すでに多くの論考で繰り返し指摘されてきたことであるため簡略に留めれば、筆者が文化人類学を学び始めた1980年代には、民族学、機能主義・社会人類学、農村・コミュニティ研究、象徴・解釈人類学等々、新旧の理論・アプローチが混在し、近年では民族誌研究の新たな古典となりつつあるブルデューの諸業績もまだ本格的には受容されていなかった。これに対し1990年代に入ると、一方で『文化を書く』(1986年)ショックをひとつの契

4 松本(1988)によれば、文化人類学と隣接諸分野における1970年代の日韓共同研究の例として、大塚民俗学会(東京教育大学日韓総合民俗調査団)と韓国民俗学会の提携により1973年から5年間にわたり実施された日韓共同民俗調査(日本からは直江広治、桜井徳太郎、竹田旦、亀山慶一らが参加)、野口隆を中心組織され、韓国側からは先述の李杜鉉、李光奎、金宅圭らが参加して1973・74年度に実施された「韓国人移民に関する文化変容の研究」(日本学術振興会の援助による)、ならびに1977年から3年にわたり実施された「日韓両国の村落社会構造の比較研究—とくに同族制度を中心として」(日本からは江守五夫、宮良高弘が参加、韓国からは先述の金宅圭も参加)が挙げられる。この他、日本の人類学者と隣接諸分野の研究者による1970年代のフィールドワーク、ならびにその諸成果についても、同論文を参照のこと。

機とする人類学の学的実践に対する内省的批判や行為主体・実践の焦点化、他方で、フィールドの急激な変化に対する民族誌研究からの内発的な問いが展開されるようになった (cf. 松田 2009: 1-24, 284-304)。他のフィールドの事情はさておき、韓国研究では1990年代がこのような二重の転機をなしており、それが本論の主題である歴史人類学・歴史民族誌的な研究を通じた農村社会研究の規範性の相対化あるいは脱構築や、多様な民族誌研究の試みとも関連しあっている。

Ⅲ 学的規範としての農村社会研究

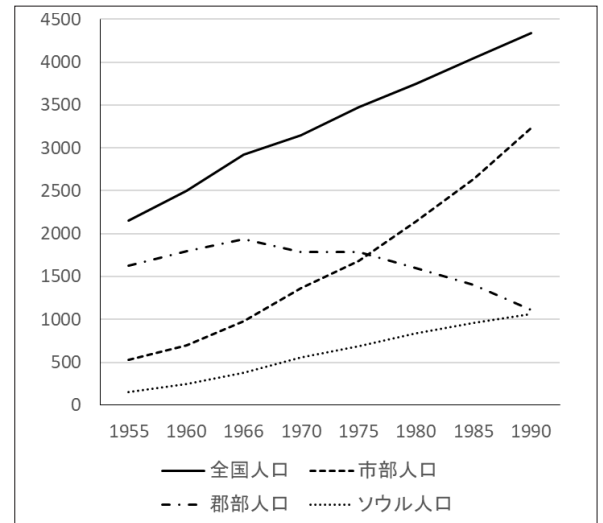
この節では1970～80年代の農村社会研究がどのように展開され、またそれが何ゆえに学的な規範性を帯びるようになったのかを考えてみたい。

1. 日本の人類学者による韓国農村社会研究の諸背景

まず、1970年代初頭に開始された戦後第一世代の日本の韓国研究が、なぜ農村を主たる現地研究の対象としたのかについて考えてみよう。図1と図2に示したように、1970年代に入った時点でも、韓国の人口の過半数(約56%)は郡部、すなわち村落部に居住し、また就業者の5割は農林水産業(大半が農業)に従事していた。数的に見れば、農村生活が当時でも韓国人の暮らしを代表するライフスタイル(のひとつ)であったことは確かであろう。しかしそれ以上に、日本の人類学者にとって農村、あるいは村落の現地研究が、いくつかの意味で着手しやすい、あるいは優先される事情もあったと考えられる。思いつくまに挙げれば、まず人類学と隣接諸分野で日本の農村・村落に関する現地研究が蓄積されており、その知見や方法論が援用可能であったこと、また、当時の日本の人類学、特に社会人類学で主要な方法論のひとつをなしていた構造機能主義が、農山村落のような自律性と完結性が高い(ように見える)社会単位への志向性を強く持っていたこと、そして北米文化人類学で展開された農民研究の受容が日本でも進んでいたことなどの諸事情が介在していたと考えられる。ここで先述の伊藤が1972年に開始した全羅南道島嶼部の珍島での調査を回顧して、なぜ農村

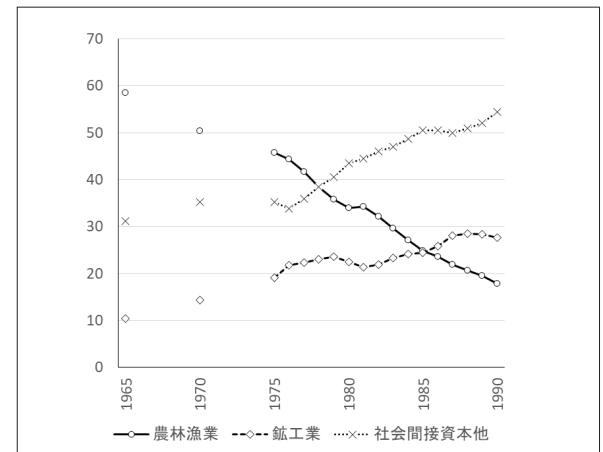
であったのか、あるいは農村でなければならなかったのかを述べた一節を見ておきたい。

図1 韓国センサス人口(単位:万人)



出典:『韓国統計年鑑』各年度版。

図2 韓国産業別就業者数(構成比)(単位:%)



出典:『韓国の社会指標』1991・2003年版。

「韓国社会の研究にはさまざまな切り口が考えられ、観察記述の対象にさまざまな水準を想定することができよう。その中で、住民の生活像に直接かつ具体的に迫ろうとするなら、1970年代の韓国において私にとって持続的な参与観察が可能な「地域社会」は農村であり、農村を差しおいては現実的な対象は考えられなかった。土地と直接結びついた農業を基盤とする日常生活には、人々の経験や知識が集積されており、また社会生活においても農村は自治的な村落組織がもっとも安定した地域単位にちがいないと考えた」(伊藤 2013: 1)。

この引用では、持続的な参与観察を可能にする地域単位としての安定性、ならびに土地という比較的堅固な生業資源に基盤を置いた経験・知識の蓄積——ただしそのような経

験・知識は、伊藤が民族誌研究の対象としてある意味で恣意的に設定したものといえようが——こそ、農村をフィールドとして選んだ理由であったとしている。すでに本格的な産業化の途上にあり、都市的な生活世界の形成も進みつつあった韓国社会において、伊藤をはじめとする日本の人類学者は、変化・消長よりも蓄積・持続性を主題として選択した。この一節はその事実を明白に語るものである。

また、1970年代前半から80年代前半までの農村を主対象とする韓国社会研究には、巫俗を中心とする民俗・信仰・宗教の研究と家族・親族に焦点を合わせた社会人類学的研究の2つの顕著な傾向が見られ、それが植民地朝鮮の民俗の現地研究を行った秋葉隆が提唱した「二重組織」の構図と相同性を示している点もしばしば指摘されてきた。次の一節は日本民族学会、現在の日本文化人類学会によって刊行された1964年から83年までの日本の民族学・社会文化人類学の研究動向の回顧(「朝鮮半島」)からの引用である。

「民族学的な接近が、巫俗をはじめとする民間信仰・儀礼に向けられたのに対して、社会人類学的な接近は、当初あまりに親族・家族に集中しがちであったように思われる。これは恰も、秋葉隆がかつて指摘した「朝鮮社会・文化の二重構造」〔筆者注：秋葉の用語に従えば「二重組織」〕を反映しているかのようであって、前者が常民の生活伝統を対象としたのに対し、後者は一部の両班社会にその典型モデルを求める傾向があった」(伊藤・杉山 1986: 186)。

ここでは、巫俗・民間信仰・儀礼への「民族学」的接近と親族・家族に集中した社会人類学的接近が対照的に取り上げられており、前者が常民の生活伝統を対象とし、後者が一部の両班社会に典型を求める点が、秋葉隆の「二重組織」論と重ね合わされている⁵。ただし、いずれのアプローチにおいても、在来の諸文化伝統の基盤が西洋化・近代化の進む都市ではなく農村に求められていた点に変わりはない。

この引用部分を執筆した伊藤は「民族学的な接近」と呼んでいるが、当該時期の民間信仰、特に巫俗の現地研究は、桜井徳太郎や竹田旦といった民俗学者や宗教(人類)学者の積極的な関与が見られるなど(竹田 1983, 1990; 桜

井 1987)、人類学と民俗学や宗教学が混在・交錯するような研究分野をなしていた。この分野については、先述の村山智順や秋葉隆の諸業績など、植民地期の日本語による実証的な研究の蓄積も厚く、それとの連続性も見て取れる。ただし、1970年代前半に日本に留学して早くから日韓双方の学界で精力的な活動を行ってきた崔吉城や後述する重松真由美など、巫俗の実践の場に生成される諸関係について社会人類学的アプローチをとる研究者も見られないわけではなかった(重松 1980; 崔 1984)。

これに対し、親族・家族やその他の社会組織・社会関係に比較的高い関心を持つ研究者は、常民的な信仰・儀礼や生活伝統を射程に入れつつも、両班(yangban ヤンバン)、すなわち朝鮮時代の文人・エリートの家系の出身者によって主に担われてきた父系の血統の再生産(具体的には、門中や族譜)、ならびにそれと密接に関係する儒教的な礼節・道徳と儀礼の伝統を、同時代の韓国農村社会の理解においても主要な参照点とみなしていた。ここで Redfield の農民研究を援用すれば、儒教と両班の伝統は朝鮮農村社会において大伝統(great tradition)を構成していたと捉えることもできよう。また善生永助や鈴木榮太郎の諸業績などの植民地期の研究とは一線を画するような、社会人類学的な関心と長期のフィールドワークを基盤とする緻密な民族誌研究も、彼らの研究を特徴付けるものであった。以下は先述のように1970年代の日本の韓国研究においてコーディネータ的役割を担っていた中根千枝のエッセイからの引用であるが、同時代の韓国、特に知識人社会における儒教伝統の根強さに触れている。

「長い儒教文化に育まれた礼節というものが、日常生活の潤滑油のように現代生活のなかで機能している」(中根 1973: 184)。

また中根は、韓国を含めた東アジア社会人類学の課題を次のように論じている。

「複雑な政治、経済の発展の歴史のなかに育まれ、維持されてきた思考様式、組織原理、世界像の認識方法といったものを見出す方向でそれぞれのテーマ、フィールドと取り組むことが必要であろう」(中根 1974: 349)。

5 秋葉によれば、「資本主義、科学的文化、基督教、マルクス主義等の多彩なる西洋文明に依って、侵蝕されない姿に於ける朝鮮の社会は大体に於て女性を中心とする巫覡的古文化の運載者と、男性本位の儒教的新文化の支持者との、二重組織に於て理解される」(秋葉 1934: 5)という。

ここでいう「歴史のなかに生まれ、維持されてきた思考様式」云々は、韓国に適用すればまさに両班と儒教の伝統となるであろう。両班と儒教の伝統は、東アジア諸社会の比較においても重視されていたといえる。

2. 韓国農村の社会人類学： 村落コミュニティと親族関係

次に当時の韓国農村を対象とした社会人類学的研究において、どのような事象がいかなる観点から記述・分析されていたのかについていくつか例示しておきたい。

まず、村落社会における諸社会関係として、契 (*kye*)、チバン、オルケシヌイ関係、その他の近隣関係を見てみよう。契とは日本の講に類似した *credit association* で、1970年代までの農村では広く見られた慣行である。特に伊藤の調査した珍島の農村では、物品やサービスの提供を通じた相互扶助、利殖、あるいは親睦を目的とした多様かつ多数の契が、既婚男女により、父系氏族・門中の境界を越えて組織されていた(伊藤 1977a, 1977b)。チバンとは、近隣に暮らす父系近親世帯のあいだで日常的に結ばれる協力関係のことで、これには主婦の積極的な参与も見られた(嶋 1976)。オルケシヌイ関係とは、父系血縁原理に従えば対立的な関係にある兄弟の妻と夫の姉妹とのあいだに醸成される、ある種親密な関係をいう(重松 1980)。また、伊藤(1983)では、儒教式の祖先儀礼の実践に現れる家族・近親や隣人世帯間の関係も取り上げられている。ここで挙げたような村落レベルでの諸社会関係が、門中や父系親族といった儒教倫理によって正統化される位階的なシステムとどのような関係を切り結ぶのが、第一世代の農村社会研究においてひとつの論点をなしていた⁶。その例として、以下に契とオルケシヌイ関係の分析をとり上げる。

「*ch'inhan sai* (friendship) や契システムは、もう一方の社会分野を支配する顕在的秩序原理としての父系血縁原理や普遍的な長幼の序列及び村落自体の共同体的・自律的な側面によって規定され、また逆にこれらを規定するという相互規定的関係に立つものであり、しかもこれらの全てが、村の境界を超えた地域社会とも構造的な相互規定関係にあるこ

とは言うまでもない。村落構造はこうした多元的な相互規定的・補完的關係を枠組として理解すべきものである」(伊藤 1977b: 283)。

「女性は結婚によって、姑・シヌイ・同婿〔兄弟の妻同士〕関係の *network* の中に組み込まれ、女性の関係として新たに嫁・姑関係、オルケシヌイ関係、同婿関係を結ぶことになる。また、結婚は出嫁外人〔女性が結婚することにより生家から婚家へ帰属を移すこと〕となり婚家においても父系を継承し次代の祭祀を行なう男子が確保されるまで常にウリ<ウリ>〔「我々」。ここでは婚家の内集团的関係性を意味する〕の *marginal* に置かれることを意味する。」「女の世界」の存在は、不安定な妻の立場を支えており、そのために不可欠である。」「女の世界」の存在は、それぞれの女性の社会関係の緊張をゆるめる機能をもっている」(重松 1980: 109-110)。

第一の伊藤論文からの引用では、友人関係が契によって組織化かつ拡大され、それが父系血縁の関係を横断する形で村落統合に寄与すると論じられるが、特に契と門中の構造的な相互補完関係が強調されており、そこに構造機能主義的な視角の介在をうかがいみることができる。第二の重松論文からの引用では、父系血統の周縁で緊張関係に置かれる女性たちにとって、生家と婚家にまたがる「女の世界」が、その緊張を緩める機能を持つとされている。いずれも父系血縁の強さに由来する緊張を緩衝する機能を持つものとして、その他の諸関係を意味付けている。

これに対し、門中、父系親族、両班、ならびに儒教伝統自体を論じた研究では、その動態的な側面についての目配りも見られる。

「*corporate group* として正式の組織体をもつ門中は、共有財産をもつことによって規定され、ある特定の村を中心地としてそこに根をおろしてはいるが、本来的にその成員の地理的拡散を含むものであるといえよう。韓国の門中は、徹底した血縁原理に基き、族譜による系譜関係にしたがってメンバーシップが決定される故に、地縁的要因そのものには左右されず、むしろ村を越えて広がってゆくことをその本質とするものである」(嶋 1978: 15)。

6 同様の論点は、1966年に忠清南道瑞山の沿海村落であるソクポ(Sökp'o)で現地調査を行った米国人文化人類学者 Brandt の著作(1971)においてすでに提示されていたものである。ここに挙げた日本の社会人類学者たちもこの著作を参照している。

この引用は、嶋陸奥彦が全羅南道内陸部の羅州の農村での調査資料に基づき、農村住民の地理的な移動と門中の下位分節の形成、ならびにその上位分節への接合を論じたものである。地理的拡散という動的な要因による父系親族の再組織化を、門中という父系親族組織、ひいては韓国の親族構造自体の本質をなすものとして性格付けている。

また次の末成論文からの引用では、広義の儒教伝統の実践による父系親族集団の社会的威信の維持・獲得と地域社会内での序列の上昇を、インドのサンスクリティゼーションに比して「両班」化と名付けている。

「本論では、伝統的韓国社会において見られる「両班」化、すなわち行動様式などを「両班」の理想型に近づけることにより、一族の社会的ランクを上昇させ、両班としてのステータスを固め、さらに一層高いランクをめざす現象をとりあつかう」（末成 1987: 45）。

それまで主に日本の農村や台湾原住民の社会構造の研究を行ってきた末成は、1970年代前半から80年代前半にかけて、複数の両班村落での短期調査や漁村での長期滞在調査など、韓国でも精力的なフィールドワークを実施した。この両班のステータスについての議論では、中小両班家系が、父系親族の組織化や祖先の顕彰、ならびに儒教伝統の実践を通じて、地域の両班共同体内でのランクの上昇をはかり両班としてのステータスを固める戦略的諸行為に着目している。

嶋が指摘した父系親族の再統合や末成が着目したステータス競争の社会文化的背景をなし、またこのような動的な過程によって再生産される社会文化システムを、先述の伊藤は「儒教複合」、「儒教共同体」という概念で捉えようとする。

「このように儒教に準拠することによって相互の密接な関連が明らかとなるこれらの世界観、人間観、秩序観、行動論、社会体制、政治過程、諸組織の総体を、儒教複合とも呼ぶべきであろうか。」「それ〔儒教理念にもとづく世界〕は極論すれば、華夷の行政的な秩序と並行して、曲阜（中国山東省）の孔府を中心にそれぞれの国・郡・郷に置かれた教化機

関の中央集権的な関係網のなかに、系列的に位置づけられることによって具現化されていたものであり、朝鮮では村の書堂までもがすっかりこの儒教共同体ともいべきものの末端に組み込まれていたといっても過言ではない」（伊藤 1993: 73-74）。

この伊藤論文からの引用では、先に引用した中根の論説で歴史に生まれ維持されてきた「思考様式、組織原理、世界像の認識方法」云々とされていたものが、韓国においては儒教伝統を主軸に構築されていることを示唆し、それを「儒教複合」と名付けている。また、末成も言及しているような両班を中心とする儒教的教化のネットワークを「儒教共同体」と捉える。しかし後述する歴史人類学的視角を先取りすれば、「儒教共同体」を基盤として形成され再生産される「儒教複合」とは、韓国の「伝統」社会を両班の社会組織と儒教伝統を主軸に再構成した仮構物といえるもので、そこから捨象される同時代的ならびに歴史的事象に対しても注意を払う必要があるといえるであろう。

3. 規範化の諸要因

本論の第一の主題は、以上のような1970年代の農村社会を対象とした社会人類学的な現地研究の成果が、後継世代の研究者によって、いかなる要因により学的規範として捉えられるようになったのか、いかえれば規範化していったのかであった。ここで規範化というのは、戦後第一世代による農村社会研究において達成されたフィールドワークと民族誌叙述の高い質が、後継世代の研究者にとって学的なスタンダードをなすようになったこと、ならびにこの農村社会研究を通じて構築された知識や農村でのフィールド経験が韓国社会を研究する者にとって必須のものとして求められるようになったことをいう。多分に筆者の経験と感覚に従った物言いではあるが、1980年代前半から90年代前半までの時期に韓国研究を志した者にとって、農村社会研究が特別な意味付けをされていたのは事実かと思う⁷。実際筆者自身、韓国の民族誌研究を行うのであれば、最初は農村で研究した方が良いと勧められたことも一度や二度ではなかった。ここでいう「学的規範」とは、そのような暗黙的でありつつも、時に明

7 規範的研究の再生産を含む90年代前半までの現地研究を俯瞰的に捉え直し歴史的脈絡化をはかる試みで、ここで述べたような雰囲気や垣間見ることができるとして、嶋陸奥彦が企画し、伊藤亜人、末成道男や重松真由美など戦後第一世代から1990年代初頭に現地研究を開始した若手まで幅広い年齢層の韓国研究者が参加した国立民族学博物館共同研究会「韓国社会——高度経済成長下のフィールドワーク」（1994・95年度）（嶋・朝倉（編）1998）を挙げることができる。

示されるものをいう。

このような規範化の要因として、第一に、戦後第一世代による韓国農村社会研究の社会人類学的研究としての、特に民族誌的な記述・分析としての質の高さをあげられる⁸。第二に、韓国社会自体においても、複雑な事情から儒教伝統がある面で強化あるいは再評価されていたことを指摘できる。第三に、日本の人類学における韓国研究の周縁性ゆえに、研究の正当性を担保する拠り所が求められていたという事情もあったとみられる⁹。ここでは第二の点についてのみ説明を補足しておく。

伊藤が描いていたような儒教複合や儒教共同体は、地方社会、少なくとも筆者が調査した内陸部の農村社会に限れば、産業化の過程で衰えを見せつつも、1990年代初頭まではある程度再生産されていた。経済成長から疎外されていた人々、特に田舎に暮らす人々たちにとっては、儒教的な孝規範に基づく家父長制的関係性こそが都市に送り出した子弟との相互依存を支える基盤となっていた。なかでも中小両班家系の出身者にとって、両班と儒教の伝統は自尊心の拠り所でもあった(cf. 本田 2016b: 383-428)。他方で、近代化・産業化の過程で農村社会にまで浸透しつつあった、必ずしも道徳的な裏付けを伴わない資本主義的な利潤追求に対し、これを儒教伝統とある面で親和性を見せる経済的ナショナリズム(個人の利益に対する国家・企業の利益の優先、統治者・経営者に対する忠誠)によって正当化する様相も見られた(Nelson 2000: 1-29)。劇的な経済成長を可能にした要因のひとつとして、儒教伝統の影響で教育に高い価値が置かれていたことを強調する論者も見られた。すなわち、経済成長の過程でも儒教伝統のある面は再生産されていたのである。また、儒教に代る倫理・道徳規範が確立されていない状況で、儒教的な論理が、時に現代文明の批判にも援用されていた。

4. 1970～80年代農村社会研究の限界

他方で、あくまでも今日の眼から見て、この時期の農村社会研究に一定の限界を見いだせるのも確かである。第一には、仮構された社会構造の構成原理をなすものとして想定

された諸規範の淵源が、両班が中央と地方における学問と政治の中心的な担い手にあり、かつ儒教、特に朱子学が政治社会の中心にあった朝鮮王朝時代に遡及されることにより、植民地性や近代性が捨象されてしまったことである。これについては、1990年代後半に韓国研究を開始した板垣竜太が、秋葉隆の二重組織論を敷衍しつつ明晰に指摘している。

「どのように「西洋文明」と「伝統」とが「三つの民俗」〔「巫俗即ちシャーマニズム」、「中国伝来の民俗」、「西洋風の思考行動の様式」〕とまで表現されるほど同時代的に併存し、秋葉をも含む植民地のシステムを形成していたかが問われなければならないだろう。〔ここでの「西洋文明」とは、朝鮮社会に成立していた諸々の不均等かつ非対称的な関係性に対して与えられた名辞であると考えの必要があり、重要なはその関係性の様態を明らかにすることなのである〕(板垣 2008: 24, 25)。

第二に、理念的なモデルをひとつの解釈枠として現実を対象化し、分析・記述することが、ある種の恣意性、あるいは歪みを含んでいたことである。例えば、親族組織において父系の血統の正統性を強調するあまり、母方や妻方の親族が時に担う役割を看過しがちであること¹⁰、社会経済的変化を正面から取り上げないこと、ならびに村落を越えた社会ネットワークが捨象されがちであることなどである。

そして第三には、1948年以降の韓国、すなわち朝鮮半島中部・南部の農村調査から朝鮮の歴史・伝統を見通そうとすることの歪みである。すなわち、北朝鮮が捨象されたままに伝統社会像が描かれてしまったことである。

このような限界の乗り越え方のひとつの方法として、次に歴史人類学・歴史民族誌的な研究を紹介したい。

IV 歴史人類学、歴史民族誌的試み

8 例えば嶋が1970年代の農村について記したエッセイ(嶋 1985)にも、当時の日本の社会・文化人類学者のフィールドに対する洞察の深さを見て取ることができる。

9 この点は、このような民族誌研究が、1980年代までの社会人類学で正統的な方法をなしていた構造機能主義との親和性の高さを示していたことの背景のひとつでもあると考える。

10 生計維持に動員される実践=実用的な関係として母方や妻方の親族が果たした役割については、本田(2016b: 211-224)を参照のこと。なお、上述の末成は東海岸の漁村での現地調査に基づく緻密な民族誌的記述において「妻方居住婚」の高い比率を指摘しているが(末成 1982: 162-264)、当時の日本の韓国研究者のあいだで、妻方親族の果たす役割についての実証的な研究はあまり試みられていなかった。

1. 歴史人類学、歴史民族誌

ここで「歴史人類学」(historical anthropology; anthropology and history)というのは、広い意味での歴史的事象を対象とする人類学的研究を指す。この「歴史的事象」には、当事者が直接に経験した時間的に近いものから、語り継がれる、あるいは文書記録として残されるより遠いものまで、相当の幅を想定できる。また単に出来事や経験それ自体を指すだけでなく、過去を認識し表象する様式としての自他の歴史シティ (historicity) をも射程に含む(Hirsch & Stewart 2005; Stewart 2016)。一方、「歴史民族誌」(historical ethnography) とは、この「歴史人類学」のひとつの方法・ジャンルといえるであろうが、マーシャル・サーリンズの物言いに従えば、人類学者自身のフィールド経験、すなわち「そこにいたこと」としての民族誌的現在を、文書記録による過去の探求と総合する研究手法を意味する(Sahlins 1993: 1)。

日本の人類学における韓国社会研究では、この歴史人類学、あるいは歴史民族誌と遡及的に捉えうるアプローチが、1980年代から萌芽的に試みられるようになり、1990年代後半から多様な試みが本格的に展開されるようになった¹¹。このようなアプローチは、北米文化人類学における韓国研究では、歴史資料へのアクセスの難しさや歴史研究の蓄積の薄さとの関係によるものか、あまり試みられていない¹²。一方韓国では、一部の人類学者による歴史民族誌的研究(金光億(2012); 安勝澤(2009)など)やここ10年あまりのあいだに盛り上がりを見せたオーラルヒストリー研究(ユン・テンニム(2003); 歴史人類学研究会(編)(2004)など)を除けば、1980年代後半に本格化した歴史民俗・郷村社会史研究や歴史社会学においてむしろ活発であったとの印象を受ける。

ここで日本の人類学における韓国朝鮮の歴史人類学・歴史民族誌の諸展開を概観しておこう。まず1990年代前半までは、先述の嶋による族譜と朝鮮戸籍のデータベース化という、社会人類学との親和性が高くはあるが容易には追隨

しがたい研究作業(Shima 1990; 嶋 2010)、ならびに原尻英樹による在日コリアンの生活史研究(原尻 1989)が見られるくらいであった。しかし、1990年代後半からは、オーラルヒストリーを通じた植民地性・近代性の批判的再検討(伊地知 2000; 鈴木 2007, 2010)、近代戸籍・家族法の批判的考察(坂元 1997)、ライフヒストリーを活用した移動する人たちの民族誌(李 2001; 林 2004, 2007; 本田 2007)、両班と常民のあいだに位置付けられる吏族という身分集団の社会史(本田 2013)、植民地朝鮮と東アジア近代性の歴史人類学(板垣 2008; 山内 2006, 2009, 2017)、さらには産業化過程での農村研究の歴史民族誌的再考(本田 2016b)など、様々な試みがなされるようになった。本節では、このような諸々の試みのなかで、学的規範としての農村社会研究がどのように相対化、あるいは脱構築されてきたのかを考えてみたい。

2. 規範の乗り越え方

まず、済州島、朝鮮半島東海岸から対馬・日本へと海の資源を求めて移動していった海女についての李善愛の研究(李 2001)、あるいは旅芸人(サーカス団)や移動商人(定期市場を巡回する薬種商人)についての林史樹の研究(林 2004, 2007)では、規範的な農村社会研究から見て「周縁」に位置付けられてきた諸主体に着目し、定住性を前提とした伝統社会の再構成(II-1 参照)に対する再検討が試みられている。ただし、先述の嶋論文で父系親族団体である門中の形成の本質を地理的拡散に見出していたように、移動への着眼は、決して「周縁」的な諸主体を対象とした民族誌研究のみに限られたものではなかった¹³。とはいえ李や林のような研究は、ライフスタイルの主要な構成要件としての移動性に光を当てた研究となっており、定住者の慣行を探求の中心においてきた農村社会研究のあり方自体をも問い直すものであったといえる。

また、族譜と朝鮮戸籍のデータベース化に基づき、17世紀以降の家族、父系親族集団、ならびに村落構成の変化を論

11 日本の人類学における東アジア研究で、上述のような意味での歴史人類学的な問題系を中心的に取り上げた先駆的な業績として、先述の未成による『東洋文化』(東京大学東洋文化研究所)誌上の特集「東アジアにおける人類学と歴史研究」を挙げられる(未成 1996)。ちなみに韓国社会を対象とした人類学的研究で、題名に「歴史人類学」という語を含めた著作は、嶋(2010)が唯一である。また、これよりも2年早く刊行された板垣(2008)は「朝鮮近代の歴史民族誌」と題されており、これが韓国研究の単著における「歴史民族誌」という題目の初出となる。ただし、サーリンズの述べたような意味でこの語を用いているわけではなく、むしろ歴史人類学的モノグラフと捉えるのが妥当と考えられる。

12 ただし、巫俗職能者のライフヒストリーをとり上げた Kendall (1988) や、大都市に移住した中高年女性が自身のライフストーリーをいかに語るのかを論じた Abelmann (2003) など、オーラルヒストリーや歴史シティを論じた研究も一部にはみられる。

13 例えば嶋は、移住者による門中の形成を次のように意味付けている。「故郷では暮らせないものが他郷へ出てゆく。他郷へ出て故郷とのつながりがなくなれば、元来は両班の出身であっても、そう認めてもらえない危険が付きまとう。「他郷暮し(t'ahyang-sari)」はみじめなものである。他郷へ移住した人が門中形成の主唱者になるとすれば、それは無名になること、したがって second class citizen になることへの拒絶ではないだろうか。」(嶋 1978: 16)。

じた嶋の一連の研究 (Shima 1990; 嶋 2010 など) は、一方で朝鮮王朝や中華という正統的な過去・中心に遡及しつつも、他方で社会経済的变化を捨象する傾向が強かった、ある意味で構造機能主義的な農村・両班研究への内省的批判を含みこんでいる。そこで嶋は、戸(世帯)の直系家族化と長男残留傾向の強まりや父系親族の集団居住と地域的拠点の形成を歴史的脈絡に位置付けなおすこと、すなわち社会構造の歴史性の回復を試みようとしている¹⁴。

さらに1990年代後半に入ると、一方で90年代前半に人類学入門した若手の研究者たちによって、他方で90年代初頭までに現地研究を試みていた中堅の研究者らによっても、1970～80年代の農村社会研究で捨象されてきた植民地性や近代性を歴史人類学的に、すなわち当事者の経験や記録に基づき、微視的に、かつ内在的視点から記述・分析する試みも本格化していった。このような研究では、社会文化的伝統を本質主義的に仮構すること自体への批判も先鋭的に展開されている。まず、伊地知の次の著作では、濟州島の村落でのフィールドワークと大阪での濟州島出身者へのインタビュー等に基づき、日本への出稼ぎ・定着と植民地期から1990年代にかけての送り元の農村の社会経済的变化が論じられている。

「濟州島の村での生活は、日本の植民地支配という歴史的構造化の力によって規定され、出稼ぎ賃労働という生活スタイルを強要されてきた。そのなかで、濟州島の人々は、自分たちの生活世界を成り立たせてきた論理を即興的に変換・改編しながら、様々な共同性を創り出している」。「私は本論のなかで、社会を構造化する力とそのなかでの即興的創発的な実践をおこなう主体化の可能性を、フィールドである濟州島の杏源里という村の人々の生活実践から考察していきたい」(伊地知 2000: 6, 29)。

この研究の批判性の強さは、大きな構造化の力に拘束される人々にとっての主体性(あるいはエージェンシー)の契機を、即興的・創発的な実践のなかに見出そうとする点にある。構造化する力としてマクロな政治経済の作用を重視する一方で、村落や地域社会レベルでのより身近な構造化をおおむね捨象するなど、記述や分析の粗削りさは否めないが、先駆的な試みとして高く評価すべきと考える。

次に板垣は、慶尚北道の尙州という地域を対象として、一

方でアーカイブ調査を、他方で現地での文書・文字資料の収集を網羅的にを行い、それをもとにこの地域の人々の植民地経験を緻密に再構成している(板垣 2008)。用いた資料には、中央の図書館・文書館に所蔵される古文書や各種刊行物だけでなく、現地の諸機関が所蔵する未公開の文書、さらには個人の日記までもが含まれる。とにかく「尙州」という名が含まれる資料であればなんでも集めるという徹底ぶりである。板垣の接近方法は、先述のように秋葉隆が二重組織論で捨象していたような「西洋文明」の名の下に隠された諸々の関係性に光を当てるものであり、彼のいう〈近世〉的な社会文化的特徴の持続・変奏と〈近代〉的諸特徴の不均等性、そしてそこから浮かび上がる植民地権力をめぐる経験の重層性を、すぐれて実証的に分析している。その意味で、規範化した農村社会研究における両班や儒教の文化伝統の実体化を歴史的に脱構築し、その限界を乗り越える成果として評価できると考える。

紙面の都合上詳細は割愛するが、植民地期朝鮮の音盤産業に対する山内の一連の論考は、日韓の研究者がある意味で共犯者的に見過ごしてきた植民者と被植民者のコンタクトゾーンに鋭く切り込んだ質の高い研究成果である(山内 2009 など)。また鈴木の一連のオーラルヒストリー研究は、1980年代後半のフィールド経験を基盤として、多様な主体に焦点を当てて日韓の近現代の人々の移動と交わりの歴史を捉え直すもので、オルタナティブかつ多声的な歴史叙述の試みとしても評価できる(鈴木 2007, 2010)。

3. 1980年代末農村の歴史民族誌

この節の締めくくりとして、筆者自身が最近まとめた成果(本田 2016b)にも触れておきたい。全羅北道の南原という地域のある農村で1980年代末に滞在調査を行ったのが、筆者にとって韓国での現地研究の初めての経験となったが、1970～80年代の農村社会研究の限界として先述したことは、実は当時の筆者自身の研究の限界でもあった。それ故に、急激な変化の過程にあった当時の農村社会を、規範的研究と折り合いをつけつついかに記述・分析してゆくのかが、長らく筆者にとっても重要な課題となっていた。その現段階での結論が、産業化過程にあった当時の調査村に対する歴史民族誌的な再考を試みたこの著作である。

14 これについて、嶋は次のように整理している。「しかし親族集団と家族レベルでの流動性はきわめて大きなものであり、朝鮮時代後期以降の農村地域を自然部落に基盤をおく安定した社会だったとみることは、実態と大きくかけ離れているといわざるをえない」。「門中では一定の地域に定着し得た幸福な少数者 happy minorities の組織である。これに対して流動していた多数者の状況については、それを解明する手がかりがないために、ほとんど考察されてこなかった」(嶋 2010: 207, 209)。

この歴史民族誌におけるひとつの課題は、1970～80年代の研究で韓国農村社会の規範、理念モデル、あるいは構造的傾向性と捉えられてきた「長男残留直系家族」、すなわち生家に長男夫婦が残留し(娘は婚出、次三男夫婦は分離独立)、親の生業(なかでも農業経営)の基盤を継承して老父母を扶養するとともに、儒教式の祖先祭祀を継承するという、祖先祭祀の実践と重ね合わされた居住・経営単位の編成が、調査当時の農村世帯において実現されにくくなっていた状況をどのように理解するかにあった。ここでの議論の出发点は、まず世帯編成を、ある種の交渉と暫定的均衡を伴う家族の再生産戦略、すなわち家族を基盤とする生計維持と社会上昇の戦略的諸実践のなかに位置付け直すことであった。まず、規範的民族誌を含む日米韓の先行研究を対照的に分析することによって、産業化以前の段階ですでに、社会経済的スペクトラムに占める位置に従って家族の再生産戦略に差異が生じていた点、そしてこのスペクトラムの中間に位置する小規模家族経営の自営農において、世帯編成としての長男残留直系家族への志向性が最も強かったと考えられる点を指摘した。また、家族の再生産戦略に生じたこのような差異を、生計・生活の必要性(実践的論理)と儒教的正統性(形式的論理)とのせめぎ合いのなかからある時点での暫定的均衡として生み出されたものと捉え直した。そして以上のような捉え方を調査当時の農村にも援用し、産業化過程での再生産条件の量的ならびに質的な変化に応じた家族の再生産戦略の再編成が、従来の「長男残留直系家族」とは異なる均衡状態を生み出したものとして、当時の世帯編成に見られた諸傾向の分析を試みた。

また今ひとつの課題として、嶋が上述の門中論とは別の論考で提示していた村落構成員の流動性と村落組織の暫定性の問題(嶋1990)について、産業化過程での変化も視野に入れて再考を試みた。産業化の過程においても、同じ村に暮らす人々や近隣に暮らす人々のあいだには伊地知が即興的・創発的共同性と呼んだような臨機応変的で時にブリーコラージュ的な相互扶助や協同が随時立ち上がり、またそれが時に上述の契の方式を借りて組織化・制度化される局面が見られた。よってこれは単純に村落共同体の解体として片づけられる問題ではなかった。この課題をめぐるのは、実践としてのコミュニティ論を敷衍しつつ、一方で可塑的で流動性の高い共同性の生成と弛緩、他方でその部分的で暫定的

な制度化・組織化に着目し、両者の時に相互依存的で時に相互触発的である関係について、筆者自身のフィールド資料と先行研究を対照しつつ分析的な記述を試みた。

以上、農村の家族と共同性についての再考は、民族誌的な質において、決して規範的研究を乗り越えるものと自己評価できるわけではないが、かわりに、自身のフィールド資料を様々な民族誌資料と対照し、両者になるべく細かい記述と分析の網をかけつつ、歴史的脈絡に位置付けなおしたという点で、規範的研究の相対化、ならびにその歴史化と再評価の一助にはなったかと考えている。

V フィールドの現在への民族誌的接近

1. 韓国社会の現在を捕捉する試み

前節では、戦後第一世代の人類学者たちによって1970年代後半から80年代前半にかけて公開され、後継世代の学的実践を陰に陽に拘束してきた農村社会研究の学的規範性を相対化あるいは脱構築する研究実践として、歴史人類学的ならびに歴史民族誌的諸研究を取りあげた。他方で、本論の冒頭で述べた通り、対象たる韓国社会は、日本の人類学で現地研究が再開／開始された時点ですでに急激な変化の途上にあった。さらに1990年代を転機とする脱工業化、新自由主義とグローバリズムの浸透、ならびに福祉国家化は、この社会に暮らす人たちの生き方の多様化・流動化を高めるものとなった。このように目まぐるしく変化し流動するフィールドの現実に対し、民族誌研究の現場ではどのような接近方法を採用ようになったのかを次に考えてみたい。

韓国の人類学者で日本をフィールドとする韓承美は、韓国の人類学が、彼女の言い方によれば「民族主義的志向の強い」(筆者なりに言い換えれば自文化への問いとしての)民俗学¹⁵から始まり、欧米人類学の本格的受容、ならびに欧米社会理論の眼前の社会問題との接合をめぐる試行錯誤を経て、(1990年代以降の地域／文化研究の隆盛とも関わりあいながら)内外のフィールドでの多様な研究に至ったとして

15 先述の金宅圭、李杜鉉、張壽根といった、1960年代に東京大学文化人類学研究室と関わりを持ち、日本の戦後第一世代の韓国研究者に対し助言者的役割を果たしてきた民俗学者たちは、韓国における(文化)人類学界の創設メンバーでもあった。

いる(Han 2015)。北米人類学の韓国研究では、韓国・日本と同様に当初は農村社会を主対象とした社会人類学的、あるいは生態人類学的研究がなされていたが¹⁶、これから述べる日本の例と比較すると、より早い段階から産業化過程での都市社会の形成(中産層、労働者階級、企業文化)を射程に入れるようになり、開発経済学の援用や階級論・ジェンダー論といった社会科学的な志向性も強く見せるようになった(cf. Janelli 1993; Abelmann 2003)¹⁷。

これに対し日本の人類学における韓国研究では、II節で論じたような農村社会研究の規範性の強さをひとつの理由とし、また韓国や米国の人類学者とは異なり政治経済に対する社会科学的な理論関心が必ずしも強くはなかったことをひとつの背景として、1990年代前半の段階でもいわゆる伝統的な事象に対する関心が色濃く見られた。表1は、韓国でのフィールドワークを1980年代初頭に開始した筆者より10歳あまり上の世代から筆者の同世代までの研究者について、当初の現地研究の主題を列挙したものである。秀村のプロテスタント教会研究、原尻の在日コリアン研究、真鍋の民衆運動、測上の信仰治療など、板垣の言い方を借りれば〈近代〉的な社会文化的諸特徴への関心も徐々に見られつつあったが、韓国や北米の動向に比べると、いわゆる伝統的な社会文化への関心が強かったことがうかがわれる。北米文化人類学ではすでに1980年代後半に活発化していた都市研究も、日本の場合、秀村の研究において先駆的に見られたくらいで、それもキリスト教信者や教会組織に焦点をあわせたものであった。

一方、表2に示したように、1990年代後半からは産業化過程での社会経済的变化に対する関心が徐々に顕在化し始め、2000年代後半以降は韓国社会の様々な現在が民族誌研究の対象とされるようになった。ここでは学位論文の刊行物として最新のものだけ、例として挙げておく¹⁸。

澤野美智子の民族誌(2017)は、乳がんを患う既婚女性による生き方の再編成に焦点をあわせたもので、近代的に再構築された民俗病因論に基づく病いの解釈、患者会という自助グループへの参加を通じたセルフ・ヘルスケア、家族との関係の主体的再編成等、医療人類学、コミュニティ論、家

族論、ジェンダー・セクシュアリティ研究にまたがる幅広い可能性を見せる研究である。

表1. 1980年代～90年代前半の研究主題

研究者	主題・フィールド	備考 ^{a)}
朝倉敏夫	島嶼部農村	
秀村研二	漁村、プロテスタント教会・祈祷院	
原尻英樹	在日コリアン	原尻(1989)
土佐昌樹	珍島の巫俗・憑依	土佐(2012)
鈴木文子	漁村・漁業	
真鍋祐子	巫俗、民衆運動	真鍋(1997)
川上新二 安田ひろみ 網野房子	珍島の巫俗	川上(2011)
本田洋	内陸農村	本田(2016b)
岡田浩樹	両班氏族	岡田(2001)
大野祐二	郷土芸能	
浮場正親	都市の巫俗、村祭	
測上恭子	キリスト教信仰治療	測上(2009)
仲川裕里	両班・族譜・養子	

出典(備考記載以外): 嶋・朝倉編(1998)、本田(2015)、Honda(2015)、Suzuki(2015)。

注a): 「備考」には関連業績として、単独の著者による学術的単行本のみ収録した。

表2. 1990年代後半以降の研究主題

a) 1990年代後半～2000年代前半

主題・フィールド	備考 ^{a)}
旅芸人、移動商人、海女	林(2007)、林(2004)、李(2001)
在外コリアン、中国朝鮮族	河上(2014)、韓(2001)
移動と生活世界の再編	伊地知(2000)
キリスト教系労働運動	
植民地期～現代の墓と葬制	
臓器移植・生殖技術	
郷土芸能の伝承	

b) 2000年代後半～

地域スポーツ実践	金(2009)
村祭と巫俗	
トランスナショナルな信仰空間	
農村移住	
早期留学	
カトリック教会・修道院	
既婚女性乳がん患者	澤野(2017)
外国人労働者、多文化社会	
脱北者	伊藤(2017)
葬祭の変化	
若者文化、消費・購買行為、K-POP ファンダム...	

出典(備考記載以外): 嶋・朝倉編(1998)、本田(2015)、Honda(2015)、Suzuki(2015)。

注a): 「備考」には関連業績として、単独の著者による学術的単行本のみ収録した。

「患者たちの病因論の語りから浮かび上がるのは、現在の韓国国家族が近代家族の理想を追い求めるもののどこかに成就しきれない部分がある様相、あるいは儒教的家族規範と近代家族規範の双方からこぼれ落ちる部分を残している様相

16 韓国の農村社会を対象とした先駆的な民族誌としては、1966年の西海岸沿海村落での滞在調査をもとに書かれた Brandt (1971) を挙げられる。Janelli & Janelli (任敦姫) (1982) では両班の集姓村落での調査に基づき儒教的な祖先祭祀を、Sorensen (1988) では文化生態学のアプローチから山村の生計経済の変化を、また Kendall (1985) では農村の巫俗信仰をそれぞれ論じている。

17 2002年に前注の Kendall の編集で刊行された論集で、Roger Janelli と任敦姫は次のように書いている。「韓国の資本主義的産業化とそれに附随する文化変容は、人類学者たちに対し、豊かであるが手ごわい挑戦の諸機会をもたらす。近年に見られる多様な職業、制度、階級分派、ならびにライフスタイルの登場は、民族誌的探究にとって数多くの新たな現場と主題を提供するが、まさにこの多様性が圧倒的なものとして迫ってくるように思われる」(Janelli & Yim 2002: 115)。これは北米の文化人類学者が、I節で述べたような韓国社会の急激な変化と生き方の分化・断絶に対し、早くから自覚的であったことを示す一例であろう。

18 表1と表2に示した研究主題の具体例については、本田(2015)とHonda(2015)で既にその相当数をとり上げているので、これを参照されたい。

である。このような疎外された部分ほどの社会にも存在しようが、韓国の「オモニ」たちはそのようなひずみの緩衝材として家族の体面を守る役割が求められてきた。これこそが現代韓国における「オモニ」イデオロギーの核心的な部分である。急速な近代化を経た韓国の場合は家族規範の変化によるひずみも大きく、その軋みを吸収しているのが「オモニ」、そしてその吸収した苦悩を吐き出させる文化的装置として用いられるのが乳がんという病気である」(澤野 2017: 443-444)。

澤野は、乳がんと共に生きる女性の語りから、儒教的家父長制あるいは西洋近代家族と韓国の家族の現実とのあいだに生ずる歪みや軋みを読み取り、その苦悩を表出する文化装置として乳がんをめぐる語り(病因論)と実践(セルフ・ケア)を再評価する。また、彼女たちが自ら同居家族に食事を供給し家事を宰領する領域、すなわち共食・家内集団に着目し、この領域における優位性を足掛かりとして夫・子供や夫側の親族との関係を交渉する過程に、「オモニ」すなわち妻=母=主婦としての主体化の契機を見出している。一方で韓国社会の現在を捕捉する試みであり、他方で多様な比較の地平を内包する研究といえる。

2. 研究の現場としての〈フィールド〉

2000年代後半以降、主題と視角の多様化が特に顕著に見られる背景には、まず先述のように研究対象としての韓国社会自体の大きな変化が介在している。韓国の人たちの生き方が、主流志向、社会経済的疎外、あるいはオルターナティブの追求というように大きく分かれてゆき、また、その実践の随所にグローバリズムの浸透とトランスナショナルな社会空間の生成を読み取ることができる¹⁹。

他方でそこには、日本と韓国の人類学、さらにいえば、対話

や知識の生成の場としての日韓の〈フィールド〉の、I節で言及した黎明期とはまた異なる形での再接近も見られる。このような表現の仕方は山内文登の物言いに従うものであるが(山内 2006)、先述のように大きく転回した日本の人類学と、グローバル化・ローカル志向・脱植民地化が重層的に進む韓国の人類学(あるいは人文社会学的な知識の生成の場)が多様な接点を持つようになってきているということである²⁰。それと併行して、研究者としてのキャリアパスも国民国家を単位とする学的共同体や単一の言語共同体内に留まるものではなく²¹。また近年の韓国では、市民運動の活発化やSNS等のネットワーク・メディアの発達・普及も助けとなり、オルターナティブな生き方や主体的な社会参与を実践する人々と知識人・運動家・専門家とが交わる様々な対話と知識生成の場が生み出されつつある²²。その意味で今日の人類学者は、自身が直接の対象とする集団や共同体を含め、異質性の高い様々な知識生産の〈フィールド〉との関わりの中かで学的な知識の生産に従事することを求められる。山内の言い方に従えば、「相互的な臨界点を貫く対話的な知識生産」の模索が、より一層課題とされるのだと思う。

VI 結語

本論では、1970年代初頭、日本の研究者による現地での民族誌研究の再開／開始以降の韓国社会を対象とした人類学的研究の展開を、戦後第一世代による農村社会研究の実践とその成果の学的規範化、歴史人類学・歴史民族誌的な研究の試みを通じた規範的研究の脈絡化と脱構築、そして錯綜するフィールドの現在への民族誌的接近に分けて論じた。個々の研究者による人類学的な研究の実践が、先行する民族誌研究、フィールドの現在、ならびに日本の学界との関係のみならず、フィールドにおける研究者・知識人さ

19 例えば、主流社会への参入のための英語能力の獲得を目的とした北米・東南アジアへの早期留学(仲川 2016)、あるいは農村移住者(帰農・帰村者)による主流社会に対するオルターナティブな生き方の追求のための海外起源の知識・技術の導入(自然農法、シュタイナー教育、非暴力対話、バーマカルチャーなど)(本田 2012, 2016a, 2019)がこれにあたる。

20 もちろん戦後第一世代の研究者たちによっても、先述のように、韓国の研究者との地道な交流が行われてきた。彼らによって、金宅圭(1964)、崔在錫(1975)のような韓国国内での民族誌研究の成果の翻訳も進められた。崔吉城のように、韓国内に留まるのではなく、日本の学界でも早くから研究活動を行っていた韓国人研究者もいる(崔 1984)。また先述のように、北米の文化人類学者 Brandt (1971)の著作も早い時期に受容されていた。他方で、日本の研究者による業績の韓国での紹介は、嶋、末成や伊藤が1970年代後半から80年代前半に韓国の学会誌に寄稿したり、その他いくつかの論文が韓国語に翻訳されたりするなど、比較的早い段階から試みられ、さらに論集や単著の翻訳も相当件数出版されている。これに比べ欧米圏をもターゲットとした研究業績の公刊は、トロント大学で学位を取得した嶋による一部業績の英文での刊行(Shima 1990など)や嶋と Roger Janelliによる英文論集の刊行(Shima & Janelli (eds) 1998)を除けば、個々の研究者による単発的な試みに留まっているのが現状である。

21 例えば、専門教育の一部を韓国や欧米の大学院で履修したり、人類学自体を海外で学び、日本で研究教育職に就いたりするなど、職業的人類学者としてのキャリアパスが多様化しているのも今日の特徴であろう。

22 運動家の言説と知識生成の場については、真鍋祐子(1997)や太田心平の諸業績(Ota 2015など)を参照のこと。

参考文献

(日本語文献)

赤松智城・秋葉隆

1937・38 『朝鮮巫俗の研究』上・下巻、大阪屋號書店。

秋葉隆

1934 「村祭の二重組織」『朝鮮民俗』2: 5-10。

1954 『朝鮮民俗誌』六三書院。

崔吉城

1984 『韓国のシャーマニズム——社会人類学的研究』弘文堂。

朝鮮総督府

1923 『朝鮮部落調査予察報告』第一冊、朝鮮総督府。

1931 『朝鮮の風水』(調査資料第31輯民間信仰第2部)、朝鮮総督府。

1932 『朝鮮の巫覡』(調査資料第36輯民間信仰第3部)、朝鮮総督府。

淵上恭子

2009 『バイオ・コリアと女性の身体——ヒトクローンES細胞研究「卵子提供」の内幕』勁草書房。

原尻英樹

1989 『在日朝鮮人の生活世界』弘文堂。

林史樹

2004 『韓国のある葉草商人のライフヒストリー——「移動」に生きる人々からみた社会変化』御茶の水書房。

2007 『韓国サーカスの生活誌——移動の人類学への招待』風響社。

本田洋

2007 「韓国の地場産業と商品資源の構築——南原の木器生産の事例から」『躍動する小生産物資源人類学4』小川了(編)、pp. 139-181、弘文堂。

2012 「韓国の帰農——智異山麓山内地域の事例から」『韓国朝鮮文化研究』11: 21-55。

2015 「日本の人類学者の韓国認識——1970年代初頭以降のフィールドワークと民族誌的知識の蓄積」『日韓関係史1965-2015 III 社会・文化』磯崎典世、李鍾久(編)、pp. 423-445、東京大学出版会。

2016a 「韓国山内地域の農村移住者と生活経験——2010年代前半の動向を中心に」『韓国朝鮮文化研究』15: 41-66。

らには市民を含む対話と知識生産の場との関係をも模索しつつ、創造的かつ主体的に行われてきたことをあらためて確認しえたと思う。

直接の研究主題の解明に留まらず、学的規範による拘束の客観化にも寄与した歴史人類学的諸研究は、一方で実証史学との接点を模索しつつ、他方で筆者が自身の歴史民族誌を通じて示したように、フィールドの現実への再接近を目指すものでもあった。一方、脱工業化、グローバル化、新自由主義の浸透、ならびに福祉国家化との相互作用のなか、韓国社会に暮らす人たちにとって、生き方の分化・流動化と、コミュニティ的な協同関係の断絶は日に日に深刻なものとなっている。筆者が別稿で論じたように、都市生活に疲れて農村に移住した「帰農・帰村人」を含め、大都市のみならず農村・地方都市においても住民の複合性と流動性は複雑な様相を見せるようになっており、そこでは生活の必要性や個々人の欲望に向けて多様な資源が導入／発見され、生き方が不断に組みかえられている。また、「農村性 rurality」と「都市性 urbanity」の境界も、揺らぎつつ、再構築されている(本田 2019)。すなわち、伊藤が1970年代初頭の珍島の農村に見出した地域単位としての安定性と生業資源に基盤を置いた経験・知識の蓄積が歴史的に相対化、脈絡化されるとともに、それがまた今日の韓国社会では期待しがたいものとなっている。

流動性を高める社会組織・人的ネットワーク、ならびに分裂・増殖する対話と知識生産の場の複雑な断絶と接合のなか、高いエージェンシーを発揮して生きる人たちとの対峙を迫られる今日の人類学者は、以前にも増して自己の力量を頼りに、異質性の高いフィールドの人たちとの試行錯誤的な疎通を求められるようになっていく。山内のいう「複数の〈フィールド〉の相互的な臨界点を貫く対話的な知識生産」は、日韓の研究者コミュニティのあいだの疎通に留まらず、多様かつ流動的な「現場」(フィールド)に参加する様々な人々との疎通と架橋的な知の構築をも含むものとして、韓国社会を研究する人類学者にとって、あらためて切実な課題となっているのだといえよう。韓国社会の内部、あるいは日韓比較に留まらない開かれた比較の地平の模索を課題として、今後もフィールドの現実との取り組みを続けてゆきたい。

- 2016b 『韓国農村社会の歴史民族誌——産業化過程でのフィールドワーク再考』風響社。
- 2019 「農村移住を契機とする生き方の転換：現代韓国社会における農村の資源化に関する試論」『朝鮮学報』249・250 合併号：1-33。
- 李善愛
2001 『海を越える済州島の海女——海の資源をめぐる女のたたかい』明石書店。
- 伊地知紀子
2000 『生活世界の創造と実践——韓国・済州島の生活誌から』御茶の水書房。
- 今村鞆
1914 『朝鮮風俗集』斯道館。
- 板垣竜太
2008 『朝鮮近代の歴史民族誌——慶北尚州の植民地経験』明石書店。
- 伊藤亜人
1977a 「韓国村落社会における契——全羅南道珍島農村の事例」『東洋文化研究所紀要』71: 167-230。
1977b 「契システムにみられる *ch'inhan-sai* の分析——韓国全羅南道珍島における村落構造の一考察」『民族学研究』41 (4) : 281-299。
1983 「儒礼祭祀の社会的脈絡——韓国全羅南道珍島農村の一事例を通して」『儀礼と象徴——文化人類学的考察』江淵一公、伊藤亜人(編)、pp. 415-442、九州大学出版会。
1993 「東アジアの社会と儒教——韓国の民族誌による展望」『アジアから考える [1] 交錯するアジア』溝口雄三、浜下武志、平石直昭、宮嶋博史(編)、pp. 53-76、東京大学出版会。
1996 「韓国・朝鮮——日本の民族学・文化人類学における研究」『日本民族学の現在——1980年代から90年代へ』クライナー・ヨーゼフ(編)、pp. 238-252、新曜社。
2013 『珍島——韓国農村社会の民族誌』弘文堂。
2017 『北朝鮮人民の生活——脱北者の手記から読み解く実相』弘文堂。
- 伊藤亜人、関本照夫、船曳建夫(編)
1987 『現代の社会人類学 1 親族と社会の構造』東京大学出版会。
- 伊藤亜人、杉山晃一
1986 「朝鮮半島」『日本の民族学 1964～1983』日本民族学会(編)、pp.186-192、弘文堂。
- 泉靖一
1966 『済州島』東京大学出版会。
- 韓景旭
2001 『韓国・朝鮮系中国人——朝鮮族』中国書店。
- 河上幸子
2014 『在米コリアンのサンフランシスコ日本街——境界領域の人類学』御茶の水書房。
- 川上新二
2011 『死者と生者の民俗誌——韓国・珍島 巫女の世界』岩田書院。
- 金明美
2009 『サッカーからみる日韓のナショナルリティとローカルティ——地域スポーツ実践の場への文化人類学的アプローチ』御茶の水書房。
- 金成垣
2008 『後発福祉国家論——比較のなかの韓国と東アジア』東京大学出版会。
- 真鍋祐子
1997 『烈士の誕生——韓国の民衆運動における恨の力学』平河出版社。
- 松田素二
2009 『日常人類学宣言!——生活世界の深層へ／から』世界思想社。
- 松本誠一
1988 「日本における文化人類学的韓国調査の展開 1960-1980 付・韓国研究者別著述目録 日本人——文化人類学・民俗学編 1965-1987」『東洋大学社会学部紀要』25 (2) : 37-76。
- 仲川裕里
2016 「韓国の早期留学と留学エージェント——カナダ・トロントの事例から」『韓国朝鮮文化研究』15: 3-27。
- 中根千枝
1973 「韓国素描」『韓国農村の家族と祭儀』中根千枝(編)、pp. 183-187、東京大学出版会。
1974 「社会人類学と東アジア」『民族学研究』39 (4) : 344-349。
- 中根千枝(編)
1973 『韓国農村の家族と祭儀』東京大学出版会。
- 岡田浩樹

- 2001 『両班——変容する韓国社会の文化人類学的研究』風響社。
- 朴東誠
2015 「日韓間人類学交流と韓国人類学の日本研究」『日韓関係史 1965-2015 III 社会・文化』磯崎典世、李鍾久(編)、pp.399-422、東京大学出版会。
- 坂元真一
1997 「敗戦前日本国における朝鮮戸籍の研究——登録技術と徴兵技術の関係を中心として」『青丘学術論集』10: 231-293。
- 桜井徳太郎
1987 『東アジアの民族宗教』(桜井徳太郎著作集第7巻)、吉川弘文館。
- 澤野美智子
2017 『乳がんと共に生きる女性と家族の医療人類学——韓国の「オモニ」の民族誌』明石書店。
- 重松真由美
1980 「賽神にみられる女性の社会関係——韓国京畿道楊州郡における巫俗の一考察——」『民族学研究』45 (2) : 93-110。
- 嶋陸奥彦
1976 「「堂内」(Chib-an) の分析——韓国全羅南道における事例の検討——」『民族学研究』41 (1) : 75-90。
1978 「韓国の門中と地縁性に関する試論」『民族学研究』43 (1) : 1-17。
1985 『韓国農村事情—「儒」の国に生きる人々の生活史』PHP 研究所。
1990 「契とムラ社会」『民族文化の世界(下) 社会の統合と動態』阿部年晴、伊藤重人、萩原眞子(編)、pp.76-92、小学館。
2010 『韓国社会の歴史人類学』風響社。
- 嶋陸奥彦・朝倉敏夫編
1998 『変貌する韓国社会——1970～80年代の人類学調査の現場から』第一書房。
- 末成道男
1982 「東浦の村と祭——韓国漁村報告」『聖心女子大学論叢』59: 123-218。
1987 「韓国社会の「両班」化」『現代の社会人類学 1 親族と社会の構造』伊藤重人、関本照夫、船曳建夫(編)、pp.45-79、東京大学出版会。
1996 「人類学と歴史研究」(特集“東アジアにおける人類学と歴史研究”)『東洋文化』76: 1-36。
- 鈴木榮太郎
1944 『朝鮮農村社会踏査記』大阪屋號書店。
- 鈴木文子
2007 「山陰からみた帝国日本と植民地——板祐生コレクションにみる人の移動と情報ネットワークの分析を中心に」『グローバル化と韓国社会——その内と外』(国立民族学博物館調査報告69)朝倉敏夫、岡田浩樹(編)、pp. 75-116、国立民族学博物館。
2010 「記録と記憶の比較から——韓国安眠島における植民という日常」『佛教大学文学部論集』94: 37-56。
- 竹田旦
1983 『木の鴈——韓国の人と家』サイエンス社。
1990 『祖霊祭祀と死霊結婚——日韓比較民俗学の試み』人文書院。
- 鳥居龍蔵
1924 『日本周囲民族の原始宗教——神話宗教の人類学的研究』岡書院。
- 土佐昌樹
2012 『韓国社会の周縁を見つめて——村祭・犬食・外国人』岩波書店。
- 山内文登
2006 「相異なる〈フィールド〉を繋ぐ知の対話的生産に向けて——日韓の植民地期歴史研究をめぐる「交流」への体験的試論」『韓国朝鮮の文化と社会』5: 37-71。
2017 「文明・文化言説と国民帝国・中華帝国・日本帝国——台湾・朝鮮の植民政策研究の理論的前進のために(1)」『東洋文化研究所紀要』171: 57-112。
- 善生永助
1943 『朝鮮の姓氏と同族部落』刀江書院。
(英語文献)
Abelmann, Nancy
2003 *The Melodrama of Mobility: Women, Talk, and Class in Contemporary South Korea*. University of Hawai'i Press.
Brandt, Vincent S. R.
1971 *A Korean Village: Between Farm and Sea*. Harvard University Press.
Chang, Kyung-Sup

- 1999 Compressed Modernity and its Discontents: South Korean Society in Transition, *Economy and Society* 28 (1) : 30-55.
- Choi, Hyup (ed.)
2013 *Representing the Cultural 'Other': Japanese Anthropological Works on Korea*. Chonnam National University Press.
- Han, Seung-Mi
2015 Know Thy Neighbor, Know Thyself: Korea and Japan through the Anthropological Looking Glass, *Japanese Review of Cultural Anthropology* 16: 209-223.
- Hirsch, Eric & Charles Stewart
2005 Introduction: Ethnographies of Historicity, *History and Anthropology* 16 (3) : 261-274.
- Honda, Hiroshi
2015 Social Anthropology of Korea in Japan after the 1980s, *Japanese Review of Cultural Anthropology* 16: 181-192.
- Itoh, Abito
2001 Japanese Research on Korea, *Japanese Review of Cultural Anthropology* 2: 39-64.
- Janelli, Roger L. (with Dawnhee Yim)
1993 *Making Capitalism: The Social and Cultural Construction of a South Korean Conglomerate*. Stanford University Press.
- Janelli, Roger L. & Dawnhee Yim Janelli
1982 *Ancestor Worship and Korean Society*. Stanford University Press.
- Janelli, Roger L. & Dawnhee Yim
2002 Gender Construction in the Offices of a South Korean Conglomerate. In *Under Construction: The Gendering of Modernity, Class, and Consumption in the Republic of Korea*. Laurel Kendall (ed.), pp. 115-139. University of Hawai'i Press.
- Kendall, Laurel
1985 *Shamans, Housewives, and Other Restless Spirits: Women in Korean Ritual Life*. University of Hawaii Press.
- 1988 *The Life and Hard Times of a Korean Shaman: Of Tales and the Telling of Tales*. University of Hawaii Press.
- Matsumoto, Seiichi
2013 Bibliography: Japanese Studies on Korea (English translation). In *Representing the Cultural 'Other': Japanese Anthropological Works on Korea*. Hyup Choi (ed.) , pp. 201-327.
- Nelson, Laura C.
2000 *Measured Excess: Status, Gender, and Consumer Nationalism in South Korea*. Columbia University Press.
- Ota, Shimpei C.
2015 Collection or Plunder: The Vanishing Sweet Memories of South Korea's Democracy Movement. In *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91) . Kyonosuke Hirai (ed.), pp. 179-193. National Museum of Ethnology.
- Park, Kyeyoung
1997 *The Korean American Dream: Immigrants and Small Business in New York City*. Cornell University Press.
- Sahlins, Marshall
1993 Goodbye to Tristes Tropes: Ethnography in the Context of Modern World History, *The Journal of Modern History* 65 (1) : 1-25.
- Sanjek, Roger
1991 The Ethnographic Present, *Man (N. S.)* 26 (4) : 609-628.
- Shima, Mutsuhiko
1990 In Quest of Social Recognition: A Retrospective View on the Development of Korean Lineage Organization, *Harvard Journal of Asiatic Studies* 50 (1) : 87-127.
- Shima, Mutsuhiko & Roger L. Janelli (eds.)
1998 *The Anthropology of Korea: East Asian Perspectives* (Senri Ethnological Studies 49) . National Museum of Ethnology.

Sorensen, Clark W.
1988 *Over the Mountains Are Mountains: Korean Peasant Households and Their Adaptations to Rapid Industrialization.* University of Washington Press.

Stewart, Charles
2016 *Historicity and Anthropology, Annual Review of Anthropology* 45: 79-94.

Suzuki, Fumiko
2015 *Anthropological Studies of Korea in Japan since the Mid-1990s: After Village Studies, Japanese Review of Cultural Anthropology* 16: 193-208.

(韓國語文獻)

김광억(金光億)
2012 『문화의 정치와 지역사회의 권력구조 : 안동과 안동 김씨』[文化の政治と地域社会の権力構造——安東と安東金氏] 서울대학교출판문화원 .

金宅圭
1964 『同族部落의 生活構造研究 : 班村文化調査報告』[同族部落の生活構造研究 : 班村文化調査報告] 靑丘大學出版部 .

안승택(安勝澤)
2009 『식민지 조선의 근대농법과 재래농법 : 환경과 기술의 역사인류학』[植民地朝鮮の近代農法と在來農法 : 環境と技術の歴史人類學] 신구문화사 .

야마우치 후미타카(山内文登)
2009 「일제시기 한국 녹음문화의 역사민족지 : 제국질서와 미시정치」[日帝時期韓國録音文化の歴史民族誌 : 帝國秩序と微視政治] 韓國學中央研究院 韓國學大學院 人類學專攻 博士學位論文 .

역사인류학연구회(歷史人類學研究会)(編)
2004 『인류학과 지방의 역사 : 서산사람들의 삶과 역사인식』[人類學と地方の歴史 : 瑞山の人たちの生と歴史認識] 아카넷 .

윤택림(ユン・テンニム)
2003 『인류학자의 과거여행 : 한 빨갱이 마을의 역사를 찾아서』[人類學者의 過去旅行 : あるアカの村の歴史を求めて] 역사비평사 .

崔在錫
1975 『韓國農村社會研究』一志社 .

혼다 히로시(本田洋)
2013 「한국의 지방유지 : 남원 지역 이족의 사례를 중심으로」[韓國の地方有志 : 南原地域吏族の事例を中心に] 『유지와 명망가 : 한·일 지역사회 구조에 대한 민족지적 비교』[有志と名望家 : 韓日地域社會構造に対する民族誌的比較](林慶澤と共著) pp. 115-224, 이매진 .

『韓國의 社會指標』各年度版, 統計庁 .
『韓國統計年鑑』各年度版, 經濟企画院調査統計局 .

Shifting Trends in the Social Anthropology of South Korea in Japan since the 1970s

Hiroshi HONDA*

In this essay, the author examines shifting trends in the social anthropology of South Korea in Japan since the early 1970s. Although social and cultural anthropology of Korea in Japan has colonial researchers as its predecessors, that is, Japanese anthropologists, folklorists, and rural sociologists who investigated Korean society and culture before the Liberation, ethnographical, field-based research in South Korea started in its genuine sense in the early 1970s, several years after the establishment of diplomatic relations between Japan and Republic of Korea. Anthropologists of the first generation after this “start,” as well as “restarting” mainly engaged in research in rural settings, which produced abundant material on the durability of Korean society and culture, such as Confucian and *yangban* traditions, kinship and the patrilineal descent system, mutual cooperation and credit associations, or shamanism and the egalitarian tradition of rural society. Sophisticated analytical frames and the delicate touches of their ethnographic descriptions made a breakthrough in Japanese anthropology of South Korea and formed a normative exemplar for anthropologists of the following generations.

While being drawn to Korean studies by these predecessors, those who have begun Korean studies since the late 1980s, including the present author, have been making efforts to overcome this normative literature motivated partly by drastic changes in the South Korean political economy, as well as by the shifting trends of Japanese anthropology. In this essay, the author reevaluates historical approaches such as social history, oral history, and historical ethnography as alternative and counter actions to these normative rural studies. In this trend, marginality, mobility, emergent communality, modernity, and colonialism were once again discovered in the ethnographic field and analytically described under critical examination.

The third trend consists of tentative ethnographic approaches to the heterogeneous realities and actualities of current South Korean society. Struggling with the fissured realities of the field as well as with multiple sites of dialogue and knowledge production emerging between Japan and South Korea, as Fumitaka Yamauchi put it, Japanese anthropologists exploring South Korean society are engaged in an endless task of ethnographic comparison and thick description.

Keywords:

South Korea, rural community studies, academic norm, anthropology and history, ethnographic present as the ethnographer's presence

*The University of Tokyo